

# 2015年の気象と昆虫の多発例

東京農業大学昆虫学教室

平井 一男 (ひらい かずお)

## はじめに

昆虫の発生と気象との関係を究明する一環として主に2015年の多発例を解析した。2015年は春から平年より気温が高く少雨傾向で、この高温状態は7月まで続いた。前報(平井, 2015b)ではキマダラカメムシとジャコウアゲハの発生と気象との関係を述べたが、本報ではそれ以外で、地域内で越冬し周年発生している昆虫類のうち、2015年に多発したヒオドシチョウ、モンクロシヤチホコ、オスグロトモエ、ダイコンサルハムシおよび少発だったアブラムシとテントウムシの発生数と気象との関係について述べる。

### I 2015年の気象推移

昆虫の発生量と気象との関係を解析するために、冬(前年12月~当年2月)から夏の気象データ(熊谷地方気象台)を採用した。2015年の前年12月は平年より1℃低かったが、1~7月まで高温で推移した。特に3~5月は異常な高温であった(図-1)。降水量は前年12月以降5月まで少雨乾燥が続き、乾湿指数(月降水量を月平均気温で割った値)は平年より小さくなった。この傾向は5月まで続き、6~7月は降雨が多く指数は大きくなった(図-2)。

### II ヒオドシチョウーエノキ

2015年はヒオドシチョウの多発現象を埼玉県上尾市内で初めて見た。春先に近くの平地林を観察していたところ、林に向かう橋の欄干で越冬後成虫が静止し暖をと

っていたのを観察した。越冬後成虫は5月後半以降に羽化してくる新成虫に比べ翅縁がすり切れて、翅色は褪せていた(図-3)。その後成虫は近くの住宅地のエノキの若葉に集中産卵したと思われ、1世代目幼虫が4月下旬にエノキ1樹に多発した。初発見者の話では幼虫の摂食音がして落ち着かなかったという。5月2日に多発していたエノキを観察したら新葉を蚕食する音がまだ聞こえた。枝先の葉はほぼ全食状態で枝のみが残りに空が透けて見えた。

同日、捕虫網で成熟幼虫をエノキの枝葉から97頭回

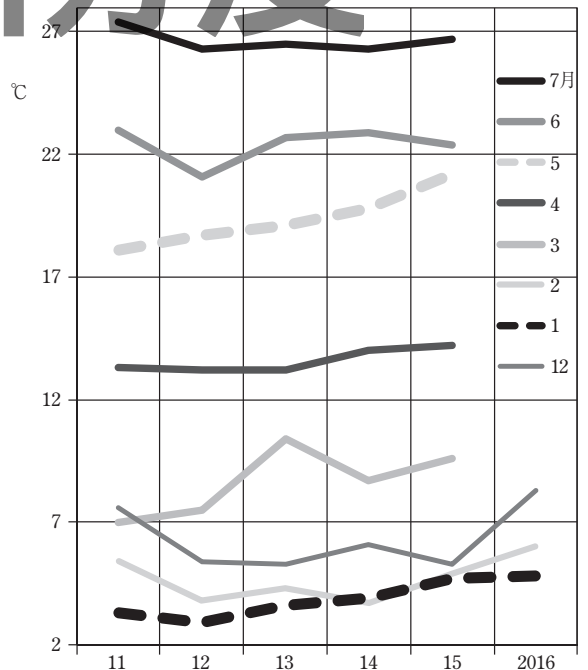


図-1 前年12月~7月までの月平均気温の推移 (2011~16年, 熊谷)

The warm and dry weather in the year 2015 related with insect abundance By K. HIRAI.

(キーワード: 越冬昆虫の多発, 気象, 気温, 降水量)